

「高校生の学力と貧困問題」とどう向きあうか ～青砥恭さんに聞く～

じっきょう地歴・公民科資料編集部

1. 「子どものリアリティ」とは何か

大学の講義で学校、教師とは何かをテーマにし、NHKが10年ほど前に放映した「学級崩壊」をテーマにしたビデオを見ました。まず、関西のある中学校での修学旅行の実践です。学校にあまり来っていない生徒など全員を連れて行こうという学年の教員たちの取り組みでした。つぎに、中学校の生活指導の実践です。荒れる生徒たちへの対策として茶髪の間は授業の教室に入れない、といった取り組みもありました。最後は関西の小学校の学級崩壊の状況を報告したものでした。小学校の低学年の子どもたちが教師の指導を全く受け入れず、徐々に学級が崩壊していくのです。子どもたちが授業中、次々にトイレに行ったり、給食の時間に机の上を飛んで歩いていました。ベテランの女性教諭が教卓の脇で嗚咽するというつらいシーンもありました。

このNHK特集を見せて、「このDVDから、君たちが心に引っかかったものを何でも良いからまとめて」と言って、学生たちに書かせました。教育学部の1年生の約90人です。最初は、「何で、もうちょっと厳しく社会のルールを守らせないのか」と答える学生がたくさんいました。また、「茶髪指導に対してどう思うか。茶髪指導に賛成か反対か」について学生たちが心に引っかかったことを書かせた上で、討論を繰り返しました。学生の意見のフィードバックを5回、6回と繰り返すと、「学校は、社会に行くために必要な準備期間。社会に出る準備段階だし、社会の一部なのだから規則（校則）を守ることは必要だ」という意見が多数だったのが、議論の中で、「学校が茶髪を禁止するのは、日本の学校が『日本国民』を育てるためにつくられたものの名残のように思う。国民意識を植え付けるために、黒髪を変えることを禁止したのではないか」という意見も出てきました。

もう一つは、『自分とは何か』を探している時期の子どもにとって、茶髪は違うものへのあこがれで、一種の自分探しではないか」という意見も出てきました。「自分をさまざまな方法で探している子どもを、校則というかたちで縛りつけるのはよくない。自分探しの途中で、その道を第三者から閉ざされたら、子どもはどう思うだろうか。学校はそれを『反抗』とか『荒れ』で片付けるが、本当は自分たちのことは自分で決めたいという主張ではないか」という意見が出てきたのです。

さらに、「学校は社会に出ていく準備段階でしかないのか」、「子どもは子ども期を生きる権利があるのではないか」、「学校というものをどう思うか」、「教師は何をすべきか」と、学校論と教師論から迫りました。これもいろいろな議論が出てきましたが、その中で、「この教室にいるほとんどの人は小中高とあまり規則を破ったことがない人たちだ。そんな私たちに規則は苦でない。そういう私たちが教師になっても、規則を破る子どもたちの気持ちがわからず、ただ『規則だから守りなさい』と言い続ける気がする」とか、「大学に入って私は髪の毛を染めたけれども、それは新しい自分になりたかったから」という意見が出てきました。

この授業の中で、多くの学生が動揺している様子が見えてきました。「校則とは一体何か？ 学校とはどういう役割を果たすところか？ 教師はどのような役割を果たさなければならないのか？ 今まで自分があたりまえだと思ったことが、すべての子どもたちにとってはそうではなかったのかもしれない」と。「規則を破るなど考えたこともない『優等生』とは違った世界に住む子どもたちがいた」ということが、彼らに見えてきたのではないかと思います。

今の小中高の教師のほとんどは、これらの大学生たちと同じ感覚を持っているのではないかと思います。だから教師が考えなくてはいけないのは、「親や

教師は今の子どもたちの現実に迫れていないのではないか？」と認識することではないでしょうか。子どもたちがなぜ、これだけ荒れるのか、原因は何か、そこまで考えが到達する前に、教師たちは自分の体験で獲得した管理的な思考でしか子どもを見ようとしていないのではないのでしょうか。

2. 広がる格差社会の中の子ども

NHK特集の中にはこういうシーンもありました。「優等生」風の生徒会執行部や学級委員の生徒が集まって教師たちと話し合う場面があるのですが、「先生たちは、自分たちを『できる子』か『できない子か』といった目で見る。だけど、自分たちの本音は違う。もっと私たちは言いたいことがある。だからそういう目で見ないでほしい。私たちはそんなに優等生じゃないし、不満がいっぱいある」と語っていました。こんな子どもたちの本音があることに對して、教師たちは、どこまで耳を澄まして聞いているのでしょうか。

事実、大学の私の受講生の中には、「中学の頃、学校が大嫌いだった。教師が理不尽だったから。生徒の主張など通るはずもなかった。反抗しても無駄だった。」「私は学校も校則も大嫌いだ。縛り付けられるのはすごくイヤだった。学校とは何かという間に答えは未だにない。考え続けている」という学生もいるのです。

90年代から続く不況と就職難の中にあって、今の若者や子どもたちは非常に体制的で保守的です。私が授業をしている学生に、「大学で茶髪禁止となったら、君たちは守るか」と質問をしたことがあります。半分を超える学生が「守る」と答えました。何でここまで学生が変わったのか、嘆く前に原因を考えた方が良いでしょう。

私は、「規則は言われた通りに守り、従う」と言わないと、この社会では生きていけないのだと、子どものころからすり込まれているのではないかと思います。だから「上から言われれば守るしかないじゃないですか」ということを躊躇なく言うわけです。若い教師たちも「それは普通でしょう」と何の疑問も持たないと思います。憲法とか人権は二の次でしょう。

問題は「こんな社会でいいのか」です。貧困の中でしか生きられない子どもがいる。貧困の中で生きてきた子どもにとって大学など無関係な世界です。親は仕事を失っている。自分の母親と父親がけんか

ばかりしていていつ家庭が崩壊するかわからない。自分に対する暴力はいつやむのか……毎日そういう不安の中で生きている子どもたちがたくさんいるわけです。一方、そういう貧困など全く目も触れないで、交流もしないで生きてきた子どもがいるわけです。

子どもたちの中にはそういう大きな二つの世界があることを、教師たちは理解しているだろうか、考えているだろうか。教師の役割は、それら二つの世界をつなぐことではないでしょうか。

正規雇用の教師たちは、今の社会にあっては決して安くない給与が保障されています。共働きなら立派な「富裕層」です。そういう教師たちが、年収200万円以下のフリーターの子どもたち、非正規雇用で夫婦共働きで年収200万～400万円で生活保護すれすれで生きている共働き夫婦、遠足のお金がすぐに出せない家庭、1万円や2万円の支払いに苦しんでいる家庭……そういう家庭の子どもたちの世界をどこまで理解できるだろうか。そんな子どもたちの生活を想像することが必要になっていると思います。

生活保護を受けている家庭の85%近くは一人親でそのほとんどが母子家庭ですが、その母子家庭の日本での平均年収は230～260万円ほどです。生活保護を受けていれば生活保護費も入れています。一方私立小学校や私立中学校に子どもを入れている親の80%は年収800万円以上世帯です。私立小学校の親の一番多い層は1200万円以上世帯です。生活保護を受けている母子家庭の母親の最終学歴は、中卒・高校中退者が3人に1人です。貧困の背景に低学歴があります。

「貧困世帯」の家庭で生きる子どもの中には次のような事例がよくあります。私が生活相談を受けてきた事例ですが、父親のDV（ドメスティック・バイオレンス）で家庭が壊れ、母親が子どもたちを連れて実家に戻る。ところが実家も母子世帯で、祖母にあたる人もかつて水商売をやって子ども（その母親）を育ててきた。あるいは、若くに結婚して子どもができたが、夫のDVで離婚する。貧困の中で子どもを育てるが、水商売の中で相手の男が次々に変わる。実際、それで何とか食いつないできた。そのうちに家庭崩壊をくり返す、といった例です。

貧困の中で生きる子どもは言います。「『貧しさ』というのは、『他の人と一緒じゃない』。他の子と『世界』が違います。一緒のことができないことです」。

他の子が買えるものが自分は買えない。他の子はジュースを買っても、自分は水とか。他の子の家には冷蔵庫や洗濯機があっても、自分の家には誰かからもらうまで無かった、とか。そういう子は本当にたくさんいます。

女の子は高校中退した場合、最後は風俗に行くケースも少なくありません。十代で。キャバクラは最後ではありません。キャバクラだけでは食べていきません。毎日仕事があるわけではなく、週に3～4回ぐらいで、1時間2000～2500円という世界ですから。それで1日6000～7000円もらっても、週4日働いて2～3万円。1カ月で10万円ちょっとにしかなりません。稼げないから結局、風俗まで行きますが、それでも、ずっと仕事ができるわけではありません。

男の子は、1980年代～90年代までは建設業界がありました。今は減りました。建設関係も毎日仕事はないから、やはり同じです。

生活保護・就学援助を受けている世帯の子どもたちは、高校進学率が非常に低いです。埼玉県の生活保護世帯では全日制高校の進学率は68%です。県全体の平均は92%ですから24%もの差があります。

また、2010年3月卒業の埼玉県南部の二つの中学校の卒業生(353人)を独自に調査したところ、全日制の公立職業高校(工業高校など)に入学した子は15人中10人(67%)が就学援助か生活保護を受けていました。同様に、定時制の公立高校に入学した子は14人中7人(50%)、通信制の公立高校は3人中3人(100%)、就職した子は4人中4人(100%)が貧困世帯でした。私立校に入学させるだけのお金は無いわけです。

生活保護や就学援助を受けている64人中、全日制普通科高校に行ったのは37人でした。普通は8割か

	生徒総数	就学援助・生保(人)	生保・就学援助受給生徒が占める割合(%)
	353	64	18.1
公立全普	215	31	14.4
公立全職	15	10	66.7
私立普	83	6	7.2
公立定時	14	7	50
公立通信	3	3	100
私立サポ	8	0	0
特別支援	4	2	50
就職	4	4	100
国立専	3	0	0

[2010年3月の埼玉県南部地域の中学(2中学)の進路先]

ら9割ぐらいにはなりますから、減茶苦茶低いことがわかります。貧困世帯の子どもたちには、大きな格差がスタートからついているのです。子どものころから虐待やネグレクトを受けている率も非常に高いのです。

3. 私たちにできることは何か

昨年暮れに、本田由紀さん(東京大学教授)もおられました。文科省に呼ばれて、鈴木寛副大臣、山中伸一初等中等教育局長、笠浩史政務官、大勢の若手の文科省官僚たちの前で高校教育改革について意見を述べる機会がありました。

私は、「学びなおしの機能と、子どもたちを社会から排除しないシステムを小中高段階でつくるべきだ。貧困層の子どもたちが、低学力のまま放置され、学校から切り離され、将来は貧困に陥るケースが今の日本社会には大量に生まれている。そういう子どもたちを放置することは、この社会の分断につながる」と述べてきました。文科省側がどの程度受け止めたかはわかりません。

今、国のレベルでは、文科省よりも厚労省や内閣府の方が子どもの貧困対策に熱心なように見えます。文科省の「学びなおし」は、厚労省や内閣府の直接的支援とは違います。厚労省や内閣府の施策は一つ作ったら、それを若手官僚たちを中心に外部から有識者を招へいして(例えば内閣府参与の湯浅誠さん)、新しい意見を取り入れながら実施に移していきます。文科省では、学校で教えること(社会体験活動等も含めて)が中心です。しかし今は、学校だけでなく地域や民間(NPOなど)との連携でやらないと解決しない問題がたくさんあります。学校・教育機関以外の組織と協力しなければ解決できない問題がほとんどだと思います。非行や不登校、中退もそうでしょう。つまり学校の「ど真ん中」で生きられる子ども以外は学校外の機関の協力で育てるしかないのです。文科省にそんな意識があるでしょうか。多くの学校も、手にかかるやっかいな子どもをどうすれば他の学校に押しつけることが出来るかという生き残り競争をしているのが実態ではないでしょうか。

私はアルバイトなどもきちんと認めて、学校の中で位置づけるべきではないかと思います。多くの高校生にとって、アルバイト抜きで生活することなどあり得ません。彼らも消費文化の中で生きていかなければなりません。携帯を持たないで今の子どもた

ちが生きられるかという無理でしょう。他の子どもとつながれないですから。携帯は「他人を傷つける道具・凶器」と見るよりも、「機能としてどう使うべきか」を教えるべきです。また、アルバイトは非常にもしろい社会体験ですが、子どもたちが低賃金で働かせられたり夜中まで働かせられたりすることを監視すべきです。こちらの方が大事だと思います。

私は大学の授業で学生たちに『山びこ学校』を読もうと呼びかけています。「最初の2～3本の作文でいいから、子どもたちの作文を読もう」と。あの実践は60年近く前の実践ですが、やはり貴重です。同じクラスの子どもの生活体験を共有することの重要性、「自分たちが生きている社会の子どもの現実、子どものリアリティにどうやって私たちは迫ることができるか」を問いかけてきますから。まして、教師がそれを知らないで仕事はできないと思います。「子どもの荒れ」「学級崩壊」、あるいは「モンスター・ペアレント」にも対応できないでしょう。

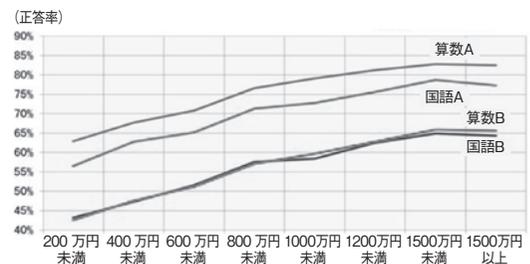
「モンスター・ペアレント」も、その親は異常な人ではなく、コミュニケーション能力が欠けていたり、教師に対して言葉を持っていなかったり、異議申し立て方法がわかっていなかったり、リーガル・リテラシー（法律に対する知識と活用する能力）がなかったりという人たちが「困った」形で異議申し立てするのであって、それは「子どもの荒れ」と大して変わりません。もちろん例外はあるでしょうが。「子どもの世界」は深いです。「進学校」の子どもたちも心の中ではすごく迷っているし、深く病んでいることもあります。自分で考えることもなく、言われるがまま、ただ受け入れていく子どもたちの存在について、教師自身が問い直す必要があります。「彼らは、自ら教師の言葉を受け入れてくれたのか、教師の権力性を受け入れたのか」です。それを考えた方がいいと思います。

貧困の中で生きる子どもたちにとっては毎日が「戦場」です。一番大変なのは「必要なものがない」ことです。日本の貧しさは、絶対的貧困ではなくて、社会的ないろいろな営みをするのに必要なものがないことです。たとえば、移動の手段は自転車しかない、車は持てない、電車になかなか乗れない……そういう移動の手段や移動にかかる費用がないのです。そうすると世界がとても狭くなり、支える人たちとはもちろん、「人」と結びつく、つながるチ

ャンスがなくなります。孤立＝(イコール) 社会的排除です。「貧困」とは、「必要なものがない」とこと「社会的孤立」、社会参加ができないことです。

私たちに何ができるかといえば、社会的に孤立している子どもたちを支えること、「つながる」ということです。

例えば、学校を退職した元教師の中には、地域で外国人の子どもたちの支援をしている、夜間中学の先生を無償でしている、子どもたちの不登校や若者たちの支援をしている、非行の子どもたちの支援をしている……そのような人たちがたくさんいます。私たちのやっている学習教室の事業（**彩の国 子ども・若者支援ネットワーク**）も、小学校レベルからわからない状態のまま放置されてきた子どもたちに、学びなおしをしようというものです。



「世帯所得と児童の学力の関係」(2008年春：文科省調査)

要するに、お金よりもマンパワーです。私のやっている事業でも、必要なのはマンパワーです。だから、「学習教室に来て教えていただけませんか、数学の先生、英語の先生、国語の先生、ぜひ来ていただけませんか、週1回でもいいから来ていただけませんか」とお願いしています。また、食べていけない若者がやってきたら、支援してあげたい。そのための資金援助を特に年配の方に協力を呼びかけています。「一緒にやりませんか」と。

現職の学校の先生はとても忙しいのですが、お辞めになってからでもいいから手伝っていただけないかと思います。週に1回来ていただいて、子どもたちと一緒にしゃべりをし、ちょっと勉強を教えたり、学校の話をしてくださるだけでもうれしいです。私たちにやれることはたくさんあると思います。(2010年12月24日、さいたま市浦和区の事務所ビルでのインタビューを編集したものです。)

青砥 恭 元埼玉県立高校教諭。現在は埼玉大学・明治大学で講師を務める。「彩の国 子ども・若者支援ネットワーク」代表理事。著書に『ドキュメント高校中退一いま、貧困がうまれる場所』(ちくま新書)。